

# 感染症になった時、置き去りにされないためには

小山内 美智子 (おさない みちこ)

この原稿を書いている時は、世界中がコロナで怯えています。私はコロナが流行する前に、<sup>きかんしえん</sup>気管支炎にかかり一か月間以上寝込んでいました。いつものことですから、慣れていると言いたいのですが、やはり24時間咳が出るという事はものすごいエネルギーを使います。時には幻覚のようなものが見え、ヘルパーさんに頼みたいとも言えない時がありました。でも気管支炎にかかっていた方がコロナにはかからないだろう、という楽観的な考えがあり、少し安心していました。気管支炎に効く吸入を行っており、その薬は保険がききません。でも私にはその薬しか効かないのです。

札幌いちご会は、今年10年間働いてくださった会計の人が退職することになりました。私たちは彼女に甘えていちご会の会計から事務まで何でもやって頂いていたので、いざ動こうとしても何から手をつけていいのか分かりませんでした。なんで彼女が辞めていくんだと、苛立ったり眠れなかったりした時期もありました。しかし何が一番抜けていたのかと言うと、今まで私が仕事を分担せずに何もわからないで進めていたことです。すべて自分の責任です。

今年いちご会は43年目に入ります。これからもこのような失敗を繰り返さなければいけないのかなと思うと、すべて捨ててしまいたくなります。しかし、いちご会は自分たちが生きるためのヘルパーを集める手段でもあります。他の障がい者にもヘルパーを少しでも派遣しなければいけません。NPO法人札幌いちご会を続けることは、これからも山あり谷ありです。

私のような学歴がない者が42年間いちご会を続けられてきたことは奇跡です。色んな壁にぶつかり、病気も何度もしました。しかし、生きるためには逃げられない仕事だと確信しています。その都度、親切な人と出会って手伝っていただきながら、いちご会を行ってきたことは、日本の歴史に残ることだと思います。

2年間私の秘書をやってくくださった人が会計をやることになりました。その人は原稿のチェックが上手だったので私は戸惑いました。しかし、彼女の友達でソロモン諸島でボランティアをしていた角田紘世さんという人がソロモンから帰ってきて、いちご会に遊びに来てくれたのです。目がきらっと輝いていたので、この人に秘書をやってもらおうと決めました。彼女は作業療法士なので、私の秘書にはちょっともったいない人なのですが、今後色々な人のところに行き、住みやすく生きるとは何なのかを考えていただこうと思います。私も年々、歳をとり座っているだけで大変になってきました。しかし、寝てばかりいるわけにはいきません。リハビリを一生続けていかなければいけないと思っています。

多くの障がい者たちは、狭いアパートで暮らしていますが、玄関に段差があったり、トイレがあっても狭いのでポータブルトイレで排泄をしている人もいます。移動するとき使用するリフトもありますが、一般のアパートでは廊下やトイレやお風呂も狭くリフトを使うことができません。ヨーロッパなどでは、天井にカーテンレールのようなものを付け、リフトをぶら下げ、どこにでも軽々と行けるのです。しかし、

その方法を日本に持ってこようとしても、日本のアパートの天井はあまりにも弱くリフトが落ちてしまいます。

これからのヘルパーは看護師に近い仕事もしなくてははいけません。理学療法士や作業療法士にもならなくてはいけないという現状があります。在宅でヘルパーだけを雇ってれば良いという時代ではなくなってきました。

医療費の削減のために実際に重い病気にかかっても入院できず、本来本人や医療従事者が行うべきケアをヘルパーがやらざるを得ません。痰の吸引や胃ろうのケア、浣腸も、ヘルパーがやらざるを得ないのです。医療の現場はたくさんの職種に分かれています。その中にヘルパーも入れていく必要があります。だからこそ、ヘルパーもスキルアップをして、月給を医療職と近づけ、障がい者の命を守っていかねばならないのです。

今私はこの原稿を新しい秘書の角田さんに打っていただいています。最初はなかなか言葉が分かってもらえなく、イラつきました。彼女もイラついたのでしょう。でも今ではスラスラパソコンを打ってくださっています。これから生活に悩んでいる人がおりましたなら、角田さんに相談して一緒に何か楽になる方法を見つけたいと思います。彼女は私の秘書ですが、多くの障がい者のことも考えていく作業療法士でありヘルパーなのです。生活で困ったことがあって、相談したい方はお電話ください。

私は小学校1年生の時、施設ですぐれた作業療法士さんと出会い、その方から障がいを持つという事がどういう事なのか、脳性まひはどのような障がいなのかを詳しく教わりました。当時、私は両手をバンザイして歩いていました。手を挙げてるのがとても辛くて、「先生、肩が辛いから手をちょん切ってください」と言いました。そんな時先生は、優しく私の手を下げてくれ、「美智子ちゃんの手はね、時期が来ると下がるからね、大丈夫」と言ってくださり涙を流していました。その時、私はこれからも自分の体を学び生きていこうと思ったのです。

今コロナの予防のために、ヘルパーさん達はマスクを着けて来てくださっています。私がうつさないか、ヘルパーさんからうつされないかドキドキです。でも今は障がいがあるとなかろうと、スタートラインは一緒なのです。うつされる方もうつす方も障がいがあるなし関係ないのです。ただ、私たちは正しい治療を受けられるのが心配です。一般の病院の看護師さん達は、私たちのような障がい者を知りません。ケアをどのようにして、行っていいのかわからない人が多いのです。

去年から重度障がい者にはヘルパーが病院に付き添っても良いことになりました。私たちの長い間の戦いが実ったのです。しかし、コロナに関してはヘルパーさん達に来てくださるとは言いにくいです。ヘルパーにも防護服を着ていただき、実際にケアがどのようにできるかを実験してみる必要があります。障がいがあるとなかろうと、コロナに打ち勝つ治療を受ける権利はあると思うのです。安全なケアとはなんなのかを議論していかなければ、障がいを持った人は治療も受けられず死んでいかなければならないかもしれません。

今後、色々な伝染病が生まれてくると私は思います。そのためにもうつさないケアの在り方を研究していかなければなりません。障がい者たちは大きな声で「私たちも一般の人と同じように治療を受けさせてください」と、叫んでいかなければ置き去りにされます。一緒に考えましょう。